

(1) 研究主題について

1 研究主題

共に学び合い伝え合う授業づくり
～ICTの効果的活用を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

現代の子どもたちが活躍するであろう未来の社会は、AI技術の進歩やグローバル化等、変化の激しい世の中になることが予測されている。そのような社会を生きる子どもたちに必要となるのは、知恵の習得はもちろん、身の回りに起こる様々な問題に自ら向き合い、その解決に向けて多様な他者と協調しながら解決策を導き出していく力である。

今回の学習指導要領改訂において、授業改善の取組の一つとして挙げられているのが、「主体的・対話的で深い学び」の実現である。教師が「アクティブラーニング」の視点からの授業改善に取り組み、子どもたち一人一人の学びを確実にしていくことが求められている。

(2) 学校教育目標から

本校の学校教育目標は、『素直で思いやりと感謝の心にあふれ 健やかな心や体と知恵をもって 進んで行動する児童の育成 ～夢いっぱい 笑顔いっぱいの学校を目指して～』である。また、学校経営のテーマを『協働』『対話』『チャレンジ(学ぶ)』と掲げ、職員がともに学び合いながら授業づくりに取り組んでいる。児童が「わかる」「できる」と感じる授業を目指し、子どもたちの学習意欲を向上させながら確かな学力をつけていくことが、学校教育目標の「進んで行動できる児童」の育成につながると考える。

(3) これまでの研究から

本校では、昨年度から「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、授業改善に取り組んできた。熊本市教育委員会から示されている「授業づくりの5つの視点」を意識した授業づくりを行ったことで、「めあて」と「ふりかえり」のパターンが定着し、児童が自分の伸びや学んだことを認識できるようになり、学ぶ喜びや楽しさを感じることができるようになった。また、タブレットを使った学び合いの場면을意図的に設定したことで、児童の学習意欲が高まり、進んで学び合う姿が多く見られるようになった。これらの成果を経て、今年度は、昨年度の取組を引き続き実践・検証していくとともに、児童のさらなる学力充実をめざした授業づくりの研究を進めていく。

3 研究テーマについて

(1) 主題、副題について

授業改善の視点として示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現には、学習内容の一方

的な教授ではなく、児童同士が様々な価値観を交流し合い自分の考えを深める活動を十分に取り入れる必要がある。また、授業者が児童に身につけさせたい力や指導事項を明確にもち、意図的に対話が生まれる場を設けることにより、質の高い学びが生まれることになるだろう。そして、子どもたちが学んだことを自分の言葉で振り返り、自分の伸びや学んだことを認識できることが、学ぶ喜びにつながり、学習意欲を高めることへもつながると考える。また、「主体的で対話的な学び」を授業の中で具現化できるようにするために、タブレット等のICT機器は有効的な学習ツールである。副題の「ICTの効果的活用」には、私たち教師がそれらのICT機器の活用を含めた授業改善を重ね、効果的な手立てを考えていくことはもちろん、児童が学び合い伝え合う場面において、タブレット等のICTを効果的に活用することで、確かな学力向上につなげていくという意味合いを込めている。これらの教師の不断の授業改善により、毎日の授業の中で、子どもたちの「わかった」「できた」「伝えたい」の声が聞こえ、学ぶよろこびや楽しさを体得する子どもの姿をめざしたい。

(2) 具体的取組

「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、熊本市教育委員会より「授業づくり5つの視点」が示されている。この5つの視点を意識した授業づくりを行い、5つの視点に沿った具体的手立てを講じていくことにする。

	5つの視点	具体的手立て (例)
1	子どもの実態に即し、本時のねらいに迫るめあてを示している。	<ul style="list-style-type: none"> ・実態把握・分析の方法 ・教材研究(見方考え方の把握) ・めあての示し方 など
2	授業に見通しと振り返りがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れの視覚化 ・モデリング ・振り返りの視点 など
3	本時のめあてに迫る子どもたちの主体的な活動がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・活動形態の工夫 ・活動の場や内容 ・ICTの効果的活用(タブレット) ・思考を深める発問 など
4	学習意欲を高めたり、理解させたりするための工夫がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・思考の視覚化(板書、ワークシート、タブレット等の活用) ・ICT機器の効果的な活用 ・日常に生かす など
5	子どもを認め、生かす場面がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・つぶやきを拾う ・発言の場やタイミングの工夫 ・教師による紹介 ・個に応じた学習支援 など

4 研究の内容

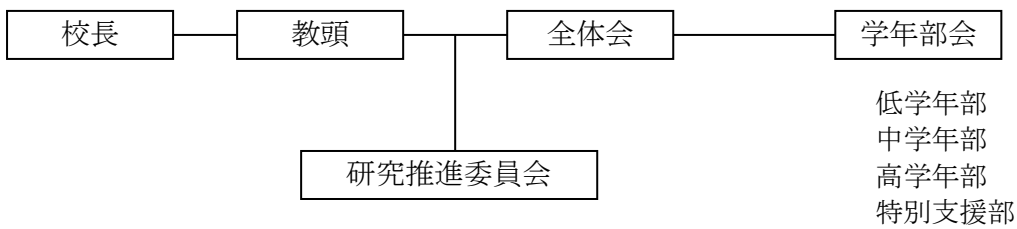
(1) めざす児童像

○学習活動に自ら進んで参加し、友達の考えを聞き、自分の考えを表現できる児童

(2) 研究の仮説

教師が「授業づくり5つの視点」を意識した授業づくりを続け、ICT機器（タブレット等）を効果的に活用し、子どもたちが共に学び伝え合う場面を意図的に取り入れていくことで、子どもたちの確かな学力向上につながり、将来にまで学び続ける態度を育成することができるであろう。

5 研究の組織



校長・教頭・教務・研究部・研究推進委員

(研究推進委員会)

- ① 校内研究の内容や方法の計画・立案
- ② 研修会・授業研究会を計画・運営
- ③ 研究資料の収集や提供、児童アンケートの集計・分析（学年）
- ④ 学びタイムの計画・運営

(学年部会)

- ① 研究の具現化（実態把握・つきたい力・具体的実践など）
- ② 研究授業についての話し合い

楠小校内研究構想図

